【投稿論文】

# 「キリシタン版対訳辞書群における聾唖関連語彙」補遺

末　森　明　夫

キリシタン版・対訳辞書群に載録されている「聾」「唖」関連語彙を調べたところ、両群の間には語彙ないし語義に顕著な違いが見られ、両群の編纂過程及び載録語彙全体における傾向の違いが「聾」「唖」関連語彙にも反映されていることが窺われた。(1) 前者は見出しラテン語［surdus］の対訳日本語に［mimixij］や［tçunbo］を充てたのに対し、後者では［qicazu］のみを充てた；(2) 前者は見出しラテン語［mutus］、［elinguis］の対訳日本語に［voxi］、［yezzu］を用いたのに対し、後者は［vbuxi］、［monoivazu］、［mugon］を用いた；(3) 前者は見出しラテン語［surdaʃter］の対訳日本語に［mimidouoi］を用いなかったのに対し、後者では［mimidovoi］を用いた。

キーワード：キリシタン版、対訳辞書、語彙、聾、唖

## 1. 序論

### 1. 1. キリシタン版・対訳辞書群

中世後期（16世紀後半）から近世初期（17世紀前半）に、イエズス会やドミニコ会の関係者が来日し、キリスト教布教の傍ら、日本語文献の翻訳・翻字（ラテン文字）や対訳辞書の編纂に努めたことが知られており、これら刊行物はキリシタン版と総称されている。キリシタン版・対訳辞書群には、イエズス会関係者の編纂になる対訳辞書群（『羅葡日辞書（以下『羅葡日』と略す)』(1595年刊行)、『天草版日葡辞書(以下『日葡』と略す)』(1603年刊行)、『ヴァチカン図書館蔵葡日辞書(以下『葡日』と略)』(1650年以降刊行か)[1)]）の他、17世紀前半に来日したドミニコ会宣教師コリャードの編纂になる対訳辞書群（『コリャード自筆西日辞書（以下『西日』と略)』(1630年以前に刊行か)、

表１　キリシタン版対訳辞書群史料一覧

| 本稿における略称 | 影印本表題 | 編者 | 刊行年 | 出版社 | 底本所蔵先 | 底本刊行年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 『羅葡日』 | 羅葡日対訳辞書 | 福島邦道・三橋健 | 1979 | 勉誠社 | オックスフォード大ボードレイ文庫 | 1595 |
| 『日葡』 パリ本 | パリ本日葡辞書 | 石塚晴通 | 1976 | 勉誠社 | パリ図書館 | 1603 |
| 『日葡』 ボードレイ本 | 日葡辞書 | 土井忠生 | 1960 | 岩波書店 | オックスフォード大ボードレイ文庫 | 1603 |
| 『日葡』 エヴォラ本 | 日葡辞書：エヴォラ本 | 大塚光信 | 1998 | 清文堂出版 | ポルトガル・エヴォラ | 1603 |
| 『葡日』 | ヴァチカン図書館蔵葡日辞書 | 京大・ヴァチカン図書館 | 1999 | 臨川書店 | ヴァチカン図書館 | 1650~ |
| 『日西』 | 日西辞書 | 大塚光信 | 1978 | 雄松堂書店 | パリ図書館 | ~1630 |
| 『西日』 | コリャード自筆西日辞書 | 大塚光信・小島幸枝 | 1985 | 臨川書店 | ヴァチカン図書館 | 1632 |
| 『羅西日』 マドリード本 | コリャード羅西日辞典 | 大塚光信 | 1966 | 臨川書店 | マドリード国立図書館 | 1632 |
| 『羅西日』 亀井本 | 羅西日辞書 | 大塚光信 | 1979 | 勉誠社 | 亀井孝氏 | 1632 |
| | 索引表題 | 編者 | 刊行年 | 出版社 | | |
| | ラホ日辞典の日本語 | 金沢大 | 2005 | 勉誠出版 | | |
| | 邦訳日葡辞書 | 大塚光信 | 1995 | 岩波書店 | | |
| | 邦訳日葡辞書索引 | 大塚光信 | 1995 | 岩波書店 | | |

『羅西日辞書(以下『羅西日』と略)』(1630年刊行))がある（表１)。また、キリシタン版・対訳辞書群は江戸時代及び明治時代初期に刊行された対訳辞書群にも大きな影響を与えており、『日葡』を種本とする『マニラ版日西辞書（以下『日西』と略)』(1632年刊行)、『日仏辞書』(1862年刊行)、『羅葡日』を種本とする『拉日辞典』(1870年刊行）等が刊行されている（表１)。

『日葡』は『邦訳日葡辞書』や『邦訳日葡辞書索引』が刊行されるなど、キリシタン版・対訳辞書群の中では最も良く研究されている（森田1967；石塚1976；森田1995；浅原2008)。一方、『日葡』以外のキリシタン版・対訳辞書群も影印本の相次ぐ刊行により、『羅葡日』、『葡日』、『西日』、『羅西日』の編纂過程が明らかにされているなど、書誌学的研究の進捗が見られる（金沢大学法文学部国文学研究室1967；島1973；福島1979；三橋1979；土井他1980；岸本2005、Kishimoto 2006；岸本2008；岸本2009；岸本1999；斎藤2001；大塚1966；大塚1967；大塚1979；大塚・小島1985；亀井1986；亀井1986；斎藤2000)。また、キリシタン版・対訳辞書群に載録されている語彙の語彙論に立脚した調査分類も行われ、日本語の語彙史における中世後期及び近世初期の語彙に多大な知見を提供している（柴田1967；遠藤1974；片桐1983；大塚1989；荒木2007；近藤・中村2009；松本2009)。

### 1. 2.「聾」「唖」語彙史

しかし、日本語語彙史における「障害者」関連語彙や「聾」「唖」関連語彙に関する報告は必ずしも多くはない（岡山1935；伊藤1998；津名2005；山本2005)。岡山（1935）は大和時代より江戸時代に渡る文献に載録されている「聾」「唖」関連語彙に言及し、「聾」「唖」語彙史の嚆矢とされている。伊藤（1998）は『日葡』に載録されている障害者関連語彙を調べ、「聾」「唖」関連語彙が8語に上ることを報告している。新谷（2010）は『羅葡日』に載録されている「聾」「唖」関連語彙を調べ、『日葡』に載録されている「聾」「唖」関連語彙との違いが見られることを明らかにしている。

しかし、『日葡』や『羅葡日』以外のキリシタン版・対訳辞書に載録されている「聾」「唖」関連語彙に関する調査報告は見られず、キリシタン版・対訳辞書群における「聾」「唖」関連語彙の調査研究が十二分に行われてきたとは言い難い面が残る。本稿においては、キリシタン版・対訳辞書群における「聾」「唖」関連語彙の網羅的調査を行うことにより、「聾」「唖」関連語彙及び障害者関連語彙の語彙史に新たな知見を呈することを試みた。

## 2. 資料及び方法

### 2. 1. 資料

調査に用いたキリシタン版・対訳辞書群関連資料の目録を表１に示す。『羅葡日』、『日葡』、『日西』、『葡日』、『西日』、『羅西日』の影印及び索引を参照し、「聾」「唖」関連語彙の目録を作成した。

### 2. 2. 凡例

本文、表、及び図説明文における「聾」

「唖」関連語彙の表記は原則として影印に従った。ラテン文字表記は［　］で示し、文頭は原則として小文字にした。翻字表記は〈　〉、資料における「聾」「唖」関連語彙語彙素の載録箇所は（　）で示した。但し、表における見出し語は太字表記にし、文頭は大文字にした。

表２　『日葡』，『羅葡日』，『羅西日』の「聾」「唖」　関連語彙目録

| 『日葡』 | 『羅葡日』 | 『羅西日』 |
|---|---|---|
| 聾関連語彙 | | |
| **Mimixij** (160r R22) | **Surdus,** a, um. Lus. Surdo. Iap. Tçunbo, mimi xiitaru mono. ¶ item, Cot ſi cujo chei to ſe não ſ ente. Iap. Niuouanu mono, l, niuoino qicoyenu mono. ¶ Item, Couſa que perdeo ogoſto. Iap. Fŭ mino vxetaru mono. ¶ Surda buccina. Lus. Bozina que ſe não ouue, ou de pequeno ſom. Iap. Qicoyezaru cai. ¶ Locus ſurdu. Lus. Lugar onde facilmente ſe não ouue. Iap. Monowootono qicoyenicuqi tocoro (801 L13) | **Surdus**, ſordo, qicazu. (131 L3) |
| ¶ Mimi tçubure. l, mimino tçubureta ſito. Surdo, ou bomẽ que não percebe as couſ as pro redeza, &c. (160 L15) | | |
| **Nireô**, Mimixij. Surdo. (368 L39 ) | | |
| **Reôqua**i. Mimixij, Surdo. ¶ Iefino qicazaru cotoua reoquaino gotoxi. O naó ouur, & descernir o bem, & mal be comoſ er ſ urdo. (208v R29) | **Súrditas**, ati. Lus. Surdeza. Iap. Riõquai. (801 L12) | |
| | **Surdè**, adu. Lus. Surdamente. Iap. Tçunboni, riõ quaini. (801 L11) | |
| **Mimixij, ijte, l, ijta.** Enſurdecer. Verb. Defect (160r R22) | **Obſurdeſco**, is. Lus. Fazer ſe ſurdo, enſurdecer. Iap. Mimi xiiru, tçũboni naru. (511 L7) | |
| ¶ Mimiga tçubururu. Enſurdecer. (160 L13) | | |
| | **Exurdo**, as. Lus. Fazer ſurdo a outrem. Iap. Tç unboni naſu. ¶ Exurdare palatũ. Lus. Priuar do ſ entiào do goſto. Iap. Agiuaiuo voboyuru xeiuo vxinaruaſuru. (272 L6) | |
| **Mimidouoi.** Couſsa que ſenão entende bem. ¶ Mimidouoi cotouari gia. He arrezo ae nio que mal ſe entende. (160 L38) | **Surdaſter**, a, um. Lus. O que ouuemal, ou he hum pouco ſurdo. Iap. Voyoſo, l, tairiacu tçunbo naru mono. (801 L10) | **Surdaſter**, ra, um; medio ſordo. mimĭdovòi. (339 L6) |
| **Mimidouona.** Idem.(160 L41) | | |
| 唖関連語彙 | | |
| **Voxi**. Mudo. (286 L35) | **Mutus,** i. Lus. Mudo. Iap. Voxi. ¶ Mutæ artes. Lus, Pinturas que eſprimem as couſas ſem ſslar. Iap. Yezzu. ¶ Item, Mutæ artes. Lus. Artes pouco nome*das. Iap. Saſodo quicoyenio naqi nôgei. Seruius. ¶ Mutæ, dicuntui literæ quædam ex conſ onantibus. ¶ Mutæ cicadæ. Lus. Cegarregas que c*ntam pouco. Iap. Sucoxi naqu xemi. (479 L13) | **Mutus**, mudo, vbuxi. (85 R7) |
| **Aſu**. i. Voxi. Mudo. ¶ Aſuno yumeuo mite catarazaruga gotoxi. Proverb. Entender a couſ a, & naõ a ſabe de clarar. (13v R7) | | |
| | **Elinguis**, e. Lus. Mudo. Iap. Voxi. (237 R10) | **Elinguis**, gue, ſin lengua o que no babla. mono iuazu, vbuxi. elinguo, as: ſacar la lengua. xita vo ſiqi nuqĭ daxi; u. (217 R36) |
| | **Muteo**, es. Lus. Enmudecer. Iap. Voxini naru. ¶ Item, Calarſe como mudo. Iap. Voxino gotoqu mugon ſuru. (478 R12) | **Muteo**, es; enmudecer. ubuxi ni nàru (285 L24) |
| | **Obmuteſco**, is. Lus. Ficar como mudo. Iap. Voxino yŏni naru. ¶ item, Não ve vſar. Iap. Xidani sutaru, ſayaranu. (506 R9) | **Obmuteſco,** is. enmudecer. mugon xi, uru. ibuxi ni naii, u. (290 R19) |
| | **Immuteſ co**, is, tui. Lus. Enmudecer. Iap. Voxini naru. ¶ Item, Calarſ e. Iap. Xizzumaru. (348 L16) | |
| 聾唖関連語彙 | | |
| **Reô a.** Mimixij, voxi. Surdo, & mudo S. (208v R2) | | |
| **その他** | | |
| ¶ Mimiga naru. Zunirem asorelbas. (160 L12) | | |

## 3. 結果

### 3. 1.『羅葡日』

『羅葡日』に載録されている見出しラテン語、対訳ポルトガル語、対訳日本語、及び関連語句に見られる「聾」「唖」関連語彙の目録を表２に示す。見出しラテン語における「聾」関連語彙は、[surdus]、[súrditas]、[surdè]、[surdaʃter]、[obsurdeʃco]、[exurdo]の６語、「唖」関連語彙は[mutus]、[elinguis]、[muteo]、[obmuteʃco]、[immuteʃco]の５語に上った。これら11語は総て1595年以前に刊行されたラテン語辞書『Calepius』に見られ、特に[surdus]、[surdaʃter]、[obsurdeʃco]、[mutus]、[elinguis]、[muteo]の６語は、1502年に刊行された『Cornucopiae』[2)]にも見られた。

対訳日本語に見られる「聾」関連語彙は、[mimixij]〈耳癈〉、[tçunbo]〈聾〉、[riŏquai]〈聾聵〉の３語、「唖」関連語彙は、[voxi]〈唖〉の１語のみであった。また、見出しラテン語[mutus]の対訳日本語語釈の中に[yezzu]〈言えず〉が見られた。

### 3. 2.『日葡』

『日葡』の３種類の伝本(ボードレイ本、エヴォラ本、パリ本)[3)]、ないし『日葡』ボードレイ本及び『日西』[4)]の影印の比較を行ったところ、見出し日本語における「聾」「唖」関連語彙の加筆、削除、ないし綴りの揺れは見られなかった。

『日葡』に載録されている見出し日本語、対訳ポルトガル語、及び関連語句に見られる「聾」「唖」関連語彙の目録を表２に示す。見出し日本語における「聾」関連語彙は、[mimixij]〈耳癈〉、[nireô]〈耳聾〉、[reôquai]〈聾聵〉の３語、「唖」関連語彙は[aʃu]〈痴子〉、[voxi]〈唖〉の２語、「聾唖」関連語彙は[reôa]〈聾唖〉の１語に上った。『日葡』は「本文」「補遺」の２部よりなるが、補遺には[nireô]〈耳聾〉が載録されていた。[reôa]〈聾唖〉には文書語を意味する註記[S.]が見られた。更に、見出し日本語[mimi]〈耳〉の関連語句に、[mimi tçubururu]〈耳潰るる〉、[mimi tçubure]〈耳潰れ〉が見られた。

『日葡』には見出し日本語[mimidouoi]〈耳遠い〉、[mimidouona]〈耳遠な〉が載録されていたものの、[mimidouoi]〈耳遠い〉には対訳ポルトガル語[couʃsa que ʃenǎo entende bem]〈よく理解されない（こと）〉が充てられていた。また、伊藤（1998）は『日葡』に載録されている「聾」関連語彙の一つに、見出し日本語[mimi]〈耳〉の関連語句[mimiga naru]〈耳鳴りがする〉を挙げている。「耳鳴り」は難聴の主な症状の一つでもあるが、聴覚障害自体を含む語とは見なし難いものとも考えられる。以上の観点より、『日葡』に載録されている[mimidouoi]〈耳遠い〉、[mimidouona]〈耳遠な〉、[mimiga naru]〈耳鳴りがする〉の３語は「聾」関連語彙には含めないことにした。

### 3. 3.『葡日』

『葡日』に載録されている見出しポルトガル語に見られる「聾」「唖」関連語彙の載録箇所を図１に示す。見出しポルトガル語における「聾」関連語彙

は［mouco］、［humẽ mouco］、［mulher mouca］、［ser mouco］、［estar mouco］、［ficar mouco」の６語に上った。但し、［ser mouco］、［estar mouco］、［ficar mouco」には対訳日本語は充てられていなかった。［ser mouco］は「聾という固定化された状態自体」、［estar mouco］は「一時的に「聴覚障害者」になっている状態」、［ficar mouco］は「聾／聴覚障害者になる」という意味を示すものと考えられる[6)]。

ポルトガル語［mouco］は『羅葡日』や『日葡』には載録されておらず、『葡日』のみに見られるものであり、現代ポルトガル語には見られない語（語彙素）でもある。『*Dicionário Raphael Bluteau*』（1728年刊行）は［mouco］を載録しており、［mouco］の同義語にポルトガル語［surdo］が挙げられている[5)]。『葡日』が『羅葡日』や『日葡』に載録されている［surdo］を載録しなかった理由は不明である。

対訳日本語に見られる「聾」関連語彙は［tçũbŏ］〈聾〉のみであった。但し、見出しポルトガル語［mouco］には対訳日本語［Tçũbŏ］、見出しポルトガル語

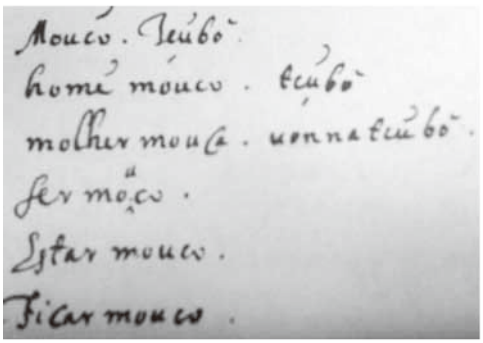



図1　『葡日』に載録された「聾」「唖」関連語彙：［mouco］（48v a6）、［humẽ mouco］、［mulher mouco］、［ser mouco］、［estar mouco］、［ficar mouco］。

［hemẽ mouco］には対訳日本語［tçũbŏ］が充てられており、［mouco］及び［homẽ mouco］それぞれの語義の違いを［tçũbŏ］の語頭を大文字、小文字で示して分ける工夫が見られた。

一方、「唖」関連語彙は見られなかったが、『葡日』は欠落箇所も少なくないことから、『葡日』には「唖」関連語彙は載録されなかったと結論付けることはできない。

### 3. 4.『西日』

『西日』に載録されている見出しスペイン語、対訳日本語、及び関連語句に見られる「聾」「唖」関連語彙の載録箇所を図２に示す。見出しスペイン語における「聾」関連語彙は［ʃordo］のみであったものの、見出しスペイン語［ʃordo］には子見出しスペイン語［ʃordo in poco］が続き、［ʃordo］には対訳日本語［qicazu］〈聞かず〉、［ʃordo in poco］には対訳日本語［mimidovoi］〈耳遠い〉が充てられていた（図２a）。

見出しスペイン語における「唖」関連語彙は［mudo］のみであり、対訳日本語［vbuxi］〈唖〉が充てられていた（図２b）。

(a)
(b)

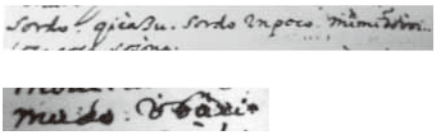


図2　『西日』に載録された「聾」「唖」関連語彙：(a)［ʃordo］（74オ25）、(b)［mudo］（84オ29）。

### 3. 5.『羅西日』

『羅西日』の２種類の伝本（マドリード本及び亀井本）の影印の比較を行った

ところ、見出しラテン語［obmuteſco］の対訳日本語における錯誤以外は、見出しラテン語、対訳スペイン語、対訳日本語及び語釈における「聾」「唖」関連語彙の加筆、削除、あるいは綴りの違いは見られなかった。『羅西日』は「本文」「補遺」「続篇」の３部よりなるが、「本文」に載録されている見出しラテン語［obmuteſco］の対訳日本語及び「続篇」に載録されている正誤表を見ると、マドリード本は［mugon xi, uru. ibuxi ni nàio, u.］,［nàio, l. nàri］,亀井本は［mugon xi, uru. ibuxi ni nàii, u.］,［nàio, l. nàri］となっている（図３）。マドリード本における［nàio］は２箇所の訂正（［i］→［r］、［o］→［i］）が必要であると考えられるものの、亀井本では［i］→［r］の訂正は行われず、［o］→［i］の訂正のみが行われたことにより、［nàii］になったものと考えられる。しかも本文の一部訂正が行われたにも関わらず、正誤表の方はそのままになっているため、亀井本では「本文」における表記［nàii］と「続篇」正誤表における表記［nàio, l. nàri］が一致しない結果になっている。すなわち、マドリード本が亀井本よりも先に刊行されたものと考えられる。このような事例はキリシタン版・対訳辞書群では、かなり頻繁に見られる（岸本、2009）。

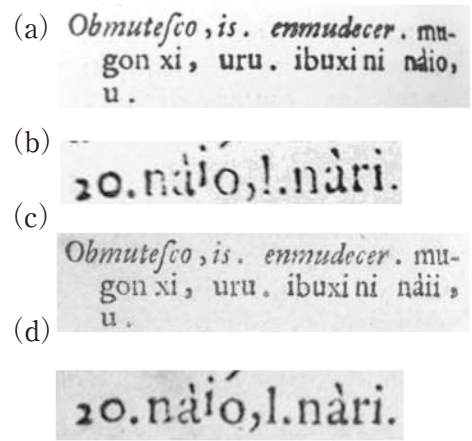



図３　『羅西日』マドリード本及び亀井本の対照：(a) マドリード本［obmuteſco］、(b) マドリード本「正誤表」(****)、(c) 亀井本［obmuteſco］、(d) 亀井本「正誤表」

『羅西日』に載録されている見出しラテン語、対訳スペイン語、対訳日本語、及び関連語句に見られる「聾」「唖」関連語彙の目録を表２に示す。見出しラテン語に見られる「聾」関連語彙は、［surdus］、［surdaſter］の２語、「唖」関連語彙は、［mutus］、［muteo］、［obmuteſco］、［elinguis］の4語に上った。『羅西日』は「本文」「補遺」「続篇」の３部よりなるが、［surdaſter］、［obmuteſco］は「続篇」に載録されていた。

『西日』では［ſordo、qicazu］と［ſordo in poco、mimidovoi］は一行に収められていたものの、『羅西日』では［surdus, ſordo, qicazu.］と［surdaſter, ra, um; medio ſordo. Mimīdovòi.］は、それぞれ異なる項に載録されていた。また、『西日』では［ſordo un poco, mimidovoi.］と書かれていたものの、『羅西日』では［ſurdaſter, ra, um; medio ſordo. Mimīdovòi.］と書かれており、対訳日本語［mimidovoi］〈耳遠い〉が充てられた子見出しスペイン語／対訳スペイン語が異なっていた。『羅西日』は『西日』における載録スペイン語を踏襲する傾向が見られ、このような例は稀である（大塚・小島1985）。

対訳日本語に見られた「聾」関連語彙は［qicazu］〈聞かず〉、［mimidovoi］〈耳遠い〉の２語、「唖」関連語彙は

［monoivazu］〈もの言わず〉、［vbuxi］〈唖〉、［mugon］〈無言〉の３語に上った。見出しラテン語［muteo］の対訳日本語語釈の中に［ubuxi］〈唖〉という表記が見られたものの、綴りの揺れの範疇に属するものと考えられた。

また、見出しラテン語［obmuteʃco］の対訳日本語語釈［obmutresco, is. Enmudecer. mugon xi, uru. ibuxi ni nàii.］の中に［ibuxi］〈唖〉という表記が見られた（図３a）。『羅西日』の「索引」では索引見出し日本語［ibuxi］〈唖〉にはラテン語［obmuteʃco］の他にラテン語［nodus］及び［nodo］が充てられており、『羅葡日』では見出しラテン語［nodus］には対訳日本語［musubime］〈結び目〉、見出しラテン語［nodo］には対訳日本語［musubu］〈結ぶ〉が充てられていた。すなわち、［ibuxi］〈唖〉は［vbuxi］／［ubuxi］〈唖〉の錯誤と考えられる。亀井（1986）は「いぶし」という方言の存在に言及していたが、本稿では論及しない。

### 3. 6. 方言地図

「聾」「唖」方言地図は「聾の一、二」及び「唖の一～九」からなる（岡山1935）。この方言地図に載録されている「聾」「唖」関連民俗語彙（方言）と、キリシタン版・対訳辞書群に載録されている「聾」「唖」関連語彙の対照を行った。キリシタン版・対訳辞書群に載録されている「聾」関連語彙、［mimixij］〈耳癈〉、［tçunbo］〈聾〉、［qicazu］〈聞かず〉、［nireô］〈耳聾〉、［reôquai］〈聾聵〉、［mimidovoi］〈耳遠い〉の6語のうち、方言地図に載録されていたものは［tçunbo］、［qicazu］の２語のみであった。「聾」関連方言は大和語系統の「キカズ系」「ツンボ系」「クヂラ系」の３系統に分類されており、［tçunbo］〈聾〉は「ツンボ系」、［qicazu］〈聞かず〉は「キカズ系」の中に見られた。

キリシタン版・対訳辞書群に載録されている「唖」関連語彙［voxi］〈唖〉、［vbuxi］〈唖〉、［monoiuazu］〈もの言わず〉、［mugon］〈無言〉の４語は、総て方言地図に載録されていた。「唖」関連方言は大和語語彙の「オーシ系」、「ウーシ系」、「イワズ系」、「ゴロ系」、「アッパ系」、「チーグー系」、漢文訓読語彙の「無語系、無口系、語遅系」の７系統に分類されており、［voxi］〈唖〉は「オーシ系」、［vbuxi］〈唖〉は「ウーシ系」、［monoiuazu］〈もの言わず〉は「イワズ系」、［mugon］は「無語系、無口系、語遅系」の中に見られた。

すなわち、対訳辞書群に載録されている「聾」「唖」関連語彙の語彙素は大和語彙と漢文訓読語彙に渡る他、総て異なる系統であることが窺われた。一方、「聾唖」関連語［reôa］〈聾唖〉は方言地図には見られなかったものの、方言地図には「聾」関連方言と「唖」関連方言の複合語と考えられる方言も「混聾系」に載録されていた。

## 4. 考察

### 4. 1.「聾」「唖」関連語彙

#### 4. 1. 1. ポルトガル語

『羅葡日』の対訳ポルトガル語、『日葡』の対訳ポルトガル語、『葡日』の見出しポルトガル語に見られる「聾」「唖」関

連語彙を指標に整理を行い、どのポルトガル語にどのような日本語が充てられているのかを検証した（表２）。

対訳ポルトガル語［surdo］が充てられた見出し日本語や対訳日本語は、［mimixij］〈耳癈〉、［tçunbo］〈聾〉、［mimitçubure］〈耳潰れ〉、［riŏquai］〈聾聵〉、［nireô］〈耳聾〉の５語に上った。『日葡』の見出し日本語［mimi tçubururu］〈耳潰るる〉には対訳ポルトガル語［enʃurdecer］が充てられていたものの、『羅葡日』の見出しラテン語［obʃurdeʃco］には、対訳ポルトガル語［fazer ʃe ʃurdo, enʃurdecer］、対訳日本語［mimi xíiru, tçũboni naru.］〈耳癈る、聾になる〉が充てられていた。すなわち、ポルトガル語［enʃurdecer］に対応する日本語語句は、［mimi tçubururu］〈耳潰るる〉、［mimi xíiru, tçũboni naru.］〈耳癈る、聾になる〉の３語に上ることが窺われた。対訳ポルトガル語［mudo］に該当する見出し日本語、対訳日本語、あるいは関連語句は、［voxi］〈唖〉、［yezzu］〈言えず〉、［aʃu］〈瘂子〉の３語に上った。また、対訳ポルトガル語［enmudecer］に充てられた対訳日本語は、『羅葡日』の［voxini naru］〈唖になる〉の１語のみであった。

『羅葡日』や『日葡』は多様な日本語語彙の載録を図るべく編纂された対訳辞書群であることからしても、単純にポルトガル語に比べて日本語の方が多様であると結論付けることはできない。しかし、『羅葡日』や『日葡』に載録されているポルトガル語の「聾」関連語彙素が総て語幹［surd-］を含む単系統派生的な成り立ちを示すのに対し、日本語の「聾」関連語彙素は大和語語彙の［mimixij］〈耳癈〉、［tçunbo］〈聾〉、［mimitçubure］〈耳潰れ〉の他、漢文訓読語彙の［riŏquai］〈聾聵〉、［nireô］〈耳聾〉に渡り、日本語における「聾」関連語彙の多様な成り立ちが窺われた。

### 4. 1. 2. ［mimixij］, ［mimitçubure］

岡山（1935）は、『大同類集聚方』に万葉仮名表記「民味志比」が見られると述べている他、『羅葡日』や『日葡』における「聾」関連語彙素の載録頻度からも［mimixij］〈耳癈〉は「聾」関連語彙の語彙素の代表として挙げられるものとも考えられる（表２）。

『日葡』は見出し日本語［mimixij、ite、itta］〈耳癈、て、る〉に続く形で、関連語句［mimitçubure］〈耳潰れ〉や［mimiga tçubururu］〈耳が潰るる〉を載録していることから、中世後期から近世初期においては、［mimixij］〈耳癈〉、［mimixiiru］〈耳癈る〉の方が［mimitçubure］〈耳潰れ〉、［mimiga tçubururu］〈耳が潰るる〉よりも一般的な語句であった可能性も考えられる。

一方、方言地図には［mimixij］〈耳癈〉は載録されていなかったものの、「クヂラ系」に属し「ミミ」が語頭につく方言「ミミクチ」「ミミンカー」などが奄美、沖縄、八重山地方に存在することが窺われた。すなわち、かつては［mimixij］〈耳癈〉、［mimitçubure］〈耳潰れ〉のように［mimi-］〈耳－〉が語頭につく「聾」関連語彙素が相当数存在したであろうことが考えられる。

### 4. 1. 3. [tçunbo]

キリシタン版・対訳辞書群を初めとするキリシタン版では、同一本において同一語に異なる綴りを用いる事例が頻出することが明らかにされている（福島1979；岸本2009）。『羅葡日』は見出しラテン語に見られる「聾」関連語彙（5語）の内、[exurdo]、[surdè]、[súrditas]、[surdus]の４語の対訳日本語には［tçunbo］という綴りを用いたが、[obsurdeſco］の対訳日本語には［tçũbo］という綴りを用いた（図４）。一方、『葡日』は［tçũbŏ］という綴りのみを用いている（図１）。このようにキリシタン版・対訳辞書群では３種類の綴り（[tçunbo]、[tçũbo]、[tçũbŏ]）による綴りの揺れが見られた。また、『葡日』の［tçũbŏ］〈聾〉という綴りは、「ツンボゥ」と語尾を延ばす発音が中世後期ないし近世初期には存在した可能性をを示唆している。

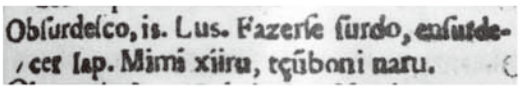

Obſurdeſco, is. Lus. Fazerſe ſurdo, enſurde-
cer Iap. Mimi xiiru, tçũboni naru.

図4 『日葡』、[obsurdeſco]。

［tçunbo］〈聾〉は『羅葡日』や『葡日』には載録されているものの、『日葡』には載録されていない（新谷2010）。『羅葡日』は［mimixij］〈耳癈〉と［tçunbo］〈聾〉を併記する例が多く、[tçunbo]〈聾〉を載録しなかった『日葡』とは際立った違いを示している。『日葡』は「文書語」の載録に積極的である一方、俗語の載録には必ずしも積極的ではなかったという傾向があり（森田1995；馬場1999；岸本1999；浅原2008）、『日葡』の編纂関係者は［tçunbo］〈聾〉を俗語と見なして『日葡』には載録しなかった可能性も考えられる。『羅葡日』も［mimixij］〈耳癈〉と［tçunbo］〈聾〉を併記してはいるものの、併記する場合は必ず[mimixij]〈耳癈〉や［mimixij］〈耳癈〉の派生語に［tçunbo］〈聾〉に続く形で書かれており、大和語系統においても［mimixij］〈耳癈〉の方が［tçunbo］〈聾〉よりも、より一般的な語であった可能性を窺わせる（表２）。

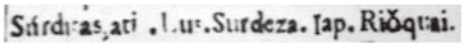
［uonnatçũbŏ］〈女聾〉は〈女〉と〈聾〉の複合語であり（図1）、『葡日』のみに載録されている。『日葡』は「盲」関連語彙に分類される見出し日本語及び対訳ポルトガル語［mecura、cego］〈盲〉と［goje、mulher cega］〈瞽女〉の両方を載録しているものの、「聾である女性」自体を指す語は載録していない（伊藤1998）。『葡日』の編纂関係者が『日葡』を参照し、「盲」関連語彙と「聾」関連語彙の整合性を図るべく、〈女聾〉の載録を図った可能性も考えられる。ただ、『葡日』は［A］～［C］の章が欠落しており、ポルトガル語［cego］〈盲〉や［mulher cega］〈瞽女〉を見ることができないため、上記の仮説の検証ができないことが惜しまれる。しかし、『葡日』が［uonnatçũbŏ］〈女聾〉を載録したことは、「聾」「唖」関連語彙における「フェミニズムと語彙の関係」を模索する上でも興味深いものがある（佐竹、2011）。

### 4. 1. 4. [reôquai]

〈聾瞶〉は『羅葡日』と『日葡』にのみ載録されているものの、『羅葡日』では［riŏquai］、『日葡』では［reôquai］という綴りになっており、綴りの揺れが

見られる（図５）。

ポルトガル人宣教師ジョアン・ロドリゲスの『日本大文典』を初めとするキリシタン版では、「開音（オー）」を［ŏ］、「合音（オー）」を［ô］と区別しようとする姿勢が見られる（土井1980）。しかし、17世紀初頭には関東では［ŏ］と［ô］の区別はほとんど見られなくなり、京都でも遅くても明暦年間までには見られなくなったものと見られている（金子1993）。当時の開合発音を巡る過渡的状況が、『羅葡日』（1595年刊行）における表記［riŏquai］と、『日葡』（1603年刊行）における表記［reôquai］の違いにも反映されている可能性もある。

(a) 

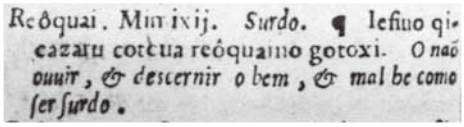

(b) 


図５ 〈聾瞶〉の綴りの対照：(a)『羅葡日』、[súrditas]、(b)『日葡』パリ本、[reôquai]。

『日葡辞書』に載録された［reôquai］〈聾瞶〉には文書語の註記はないものの、漢文訓読語彙語彙素と見られる（小野2011）。〈聾瞶〉はよく似た語義を持つ類義語〈聾〉と〈瞶〉の複合語という語構造を持つ。「唖」関連語彙や「盲」関連語彙にはこのような語構造を持つ語（語彙素）は見られず、「聾」関連語彙における漢文訓読語彙の多様性が伺われる（岡山1935）。瘖瘂という類義語複合語との対比。

また、『羅葡日』では［surdè］の対訳日本語として［tçunboni］〈聾に〉と並んで［riŏquaini］〈聾瞶に〉が挙げられていることから、特定の階層では［reôquaini］〈聾瞶に〉が［tçunboni］〈聾に〉と同じように用いられていたことが窺われる。

### 4. 1. 5. ［nireô］

［nireô］〈耳聾〉は『日葡』「補遺」に載録されており、対訳ポルトガル語［surdo］が充てられている。この語は文書語の註記はないものの、漢文訓読語彙語彙素であるものと考えられる（小野2011）。実際、『日葡』「補遺」は同書「本文」に比して漢文訓読語彙に属するものと考えられる語彙素の載録に努めた傾向が見受けられる（森田1967；土井1980）。

〈耳聾〉は〈聾瞶〉と似た複合語構造を持つが、〈聾瞶〉とは異なり、〈耳〉という「対象物を示す語」と〈聾〉という「対象物の状態を表す語」の複合語の形を取っている。「盲」関連語彙の中には〈耳聾〉に似た語構造を取る複合語〈盲目〉があるが、〈耳聾〉と異なり、「対象物の状態を表す語」に「対象物を示す語」が続く形になっている。実際、〈目盲〉や〈聾耳〉という語を目にする機会はほとんどない。「聾」関連語彙素と「盲」関連語彙素における語構造の違いを明らかにすべく、「聾」「唖」関連語彙と「盲」関連語彙の対照を行うことが望まれる。

### 4. 1. 6. ［reôa］

［reôa］〈聾唖〉は『日葡』のみに載録されており、文書語の註記がある。『日葡』の3種類の伝本（ボードレイ本、エヴォラ本、パリ本）の影印では、いずれも［reô］と［a］の間に字空けがあるようにも見受けられる（図６）。これは単に印刷上の問題であるものともかんがえ

らえるが、［reôa］〈聾唖〉の対訳ポルトガル語は［surdo、& mudo］と書かれていることから、意図的に［reô］と［a］の間の字空けを行うことにより、〈聾〉と〈唖〉の複合語であることを示そうとした可能性も考えられる。［reôquai］〈聾聵〉や［nireô］〈耳聾〉も複合語ではあるが、いずれも対訳ポルトガル語は［surdo］という単語であるため、［reô-］と［-quai］の間、もしくは［ni-］と［-reô］の字空けは行われなかったことも考えられる（図５）。

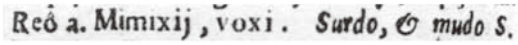


図6 『日葡』パリ本、［reô a］。

**4. 1. 7.［qicazu］**

［qicazu］〈聞かず〉は『西日』と『羅西日』のみに載録されている。コリャードが『西日』や『羅西日』に［mimixij］〈耳癈〉や［tçunbo］〈聾〉を載録しなかった理由は不明であるが、コリャードの「イエズス会関係者が編纂した対訳辞書群との違いを打ち出す」という思惑が反映された結果と見なすことも可能である（大塚1970；大塚・小島1985）。

一方、『羅葡日』や『日葡』が［qicazu］〈聞かず〉を載録しなかった理由もまた不明である。方言地図を見ると、九州地方にも「キカズ系」方言が散見される。明治時代に「キカズ系」方言が用いられたからといって、中世後期や近世初期に九州地方で「キカズ系」方言が用いられていたかどうかを速断することはできないものの、イエズス会関係者が［qicazu］〈聞かず〉という語の存在を知っていた可能性は十分にある。『羅葡日』や『日葡』の編纂関係者は［qicazu］〈聞かず〉は［mimixij］〈耳癈〉などに比べて俗語的と見なし載録は見合わせた可能性もあるが、類推の域を出ない。

**4. 1. 8.［mimidouoi］,［mimidovoi］**

現在の日本語〈耳遠い〉は、⑴耳がよく聞こえない（「難聴」の語義とほぼ同一とみられる）、⑵聞き慣れない。聞いても理解できない（大辞泉による）という２つの語義を持っている。『*Cornucopiae*』（1502年刊行）は見出しラテン語［surdus］及び［surdaſter］を載録しており、［surdaſter］には「難聴」の語義に該当する説明が書かれている（図７a）。また、『*Ambrosius Calepinus Passeratii sive linguarum novem romanae, graecae, ebraicae, gallicae, italicae, germanicae, hispanicae, anglicae, belgicae dictionarium*』（1650年刊行）[7]では、見出しラテン語［surdaſter］に充てられた対訳外国語の中には、対訳スペイン語［sordo in poco］が見られるが、この対訳スペイン語［sordo in poco］は『葡日』に載録されている。

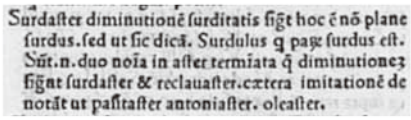
『羅葡日』は見出しラテン語［surdaſter］に対訳ポルトガル語［o que ouuemal, ou he hum pouco ſurdo.］、対訳日本語［voyoſo, l, tairiacu tçunbo naru mono］〈大凡、あるいは大略聾なる者〉を充ててはいるものの、［mimidouoi］〈耳遠い〉を充てていない（『羅葡日』は［mimidouoi］〈耳遠い〉自体を載録していない）。『日葡』は見出し日本語［mimidouoi］〈耳遠い〉に対訳ポルトガル語［couſsa que ſenão entende bem.］〈よく理解されない（こ

と)〉を充てている。一方、『西日』は子見出しスペイン語［sordo in poco］に対訳日本語［mimidovoi］〈耳遠い〉を充て、『羅西日』は見出しラテン語［surdaſter］に対訳スペイン語［medio ſordo］、対訳日本語［mimidovoi］を充てている。すなわち、『羅葡日』や『日葡』の編纂関係者はラテン語［surdaſter］と日本語［mimidouoi］〈耳遠い〉の語義は異なるものと見なし、『西日』や『羅西日』の編纂者でもあるコリャードは［surdaſter］と［mimidouoi］〈耳遠い〉の語義が同一と見なしていたであろうことが窺われる。

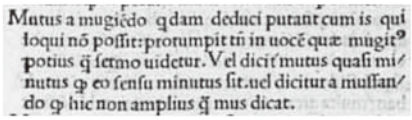
『羅葡日』、『日葡』、『西日』、『羅西日』における［mimidouoi］/［mimidovoi］〈耳遠い〉の記載状況からは、次の可能性も考えられる。⑴『羅葡日』や『日葡』編纂関係者は［mimidouoi］〈耳遠い〉の２つの語義を認識してはいたものの、［mimixij］〈耳癈〉を初めとする「聾」関連語彙が他にも載録されていることから、［mimidouoi］〈耳遠い〉の「聞きなれない。聞いても理解できない」という語義のみを載録した。⑵一方、コリャードはイエズス会関係者が編纂した対訳辞書群との違いを打ち出す思惑より、［mimidovoi］〈耳遠い〉の「耳がよく聞こえない」という語義のみを載録した。

近世における〈聾〉は軽度から重度に渡る聴覚障害全般を含意する広義的語義で用いられることが一般的であったものと見られている（岡山1935）。しかし、『西日』や『羅西日』に載録されている「聾」関連語彙は、〈聾〉の広義的語義も示唆されるものの、現在の「難聴」に該当する語義で載録されている［mimidouoi］/［mimidovoi］〈耳遠い〉もあり、〈聾〉と〈耳遠い〉が使い分けられていたことが窺われる。蘭学・洋学資料・対訳辞書群や中世・近世の文献における〈聾〉と〈耳遠い〉の使用例及び語義を検証し、中世から近代に渡る〈聾〉と〈耳遠い〉の語義の時系列的整理を行うことが望まれる[8]。

(a)


Surdaſter diminutionē ſurditatis ſig̃t hoc ē nō plane
ſurdus. ſed ut ſic dicā. Surdulus q̃ paꝝ ſurdus eſt.
Sūt. n. duo noīa in aſter termiata q̃ diminutionez
ſig̃nt ſurdaſter & reclauaſter. cætera imitationē de
notāt ut paſſtaſter antoniaſter. oleaſter.

(b)


Mutus a mugiēdo q dam deduci putant cum is qui
loqui nō poſſit: prorumpit tñ in uocē quæ mugit?
potius q̃ ſermo uidetur. Vel dicit mutus quaſi mi/
nutus ꝙ eo ſenſu minutus ſit. uel dicitur a muſſan/
do ꝙ hic non amplius q̃ mus dicat.

(c)

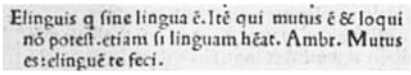

Elinguis q ſine lingua ē. Itē qui mutus ē & loqui
nō poteſt. etiam ſi linguam hēat. Ambr. Mutus
es: elinguē te feci.

図７　『*Cornucopiae*』、(a)［surdaſter］、(b)［mutus］、(c)［elinguis］。

### 4. 1. 9.［voxi］,［vbuxi］

〈唖〉[9]の表記は、『羅葡日』や『日葡』では［voxi］〈唖〉になっている一方、『西日』や『羅西日』では［vbuxi］〈唖〉になっている。岡山（1935）は『大同類聚方』に万葉仮名表記「於布志」が見られると述べている他、方言地図でも「オーシ系」方言は全国各地に散見される一方、「ウブシ」は九州及び中国地方にのみ見られることから、［voxi］の方が一般的であったことが窺われる。

『西日』や『羅西日』が［voxi］を載録しなかった理由は不明であるが、この事例からコリャードの「イエズス会関係者の編纂になる対訳辞書群との違いを打ち出す」という思惑を汲み取ることも可能である。

**4. 1. 10.［monoivazu］,［yezzu］**

『羅葡日』は見出しラテン語［mutus］に対訳日本語［voxi］〈唖〉、関連語［yezzu］〈言えず〉の順に２語を充てているが、『羅西日』は見出しラテン語［mutus］に対訳日本語［vbuxi］〈唖〉のみを充てている（表３）。『羅葡日』は見出しラテン語［elinguis］に対訳日本語［voxi］〈唖〉のみを充てているが、『羅西日』は見出しラテン語［elinguis］に対訳日本語［monoivazu］〈もの言わず〉、［vbuxi］〈唖〉の順に２語を充てている（表３）。つまり、『羅葡日』では［yezzu］〈言えず〉は［mutus］の関連語の対訳日本語として載録されている。『羅西日』では［monoivazu］〈もの言わず〉は［elinguis］の対訳日本語として載録されている。

『*Cornucopiae*』における［mutus］と［elinguis］の語釈は、［mutus］は「聾に起因する唖（聾唖）」、［elinguis］は「聾に起因しない唖（聴唖）」という語義を含意する可能性を示唆している（図7b, c）。すなわち、『羅西日』は「聴唖」の語義を含意する日本語語彙として、『羅西日』では［monoivazu］〈もの言わず〉を載録した可能性もある。しかし、『羅葡日』は［yezzu］〈言えず〉を［mutus］の関連語の対訳日本語として載録したという問題は解決されず、錯誤である可能性も残る。当時、［monoivazu］〈もの言わず〉や［yezzu］〈言えず〉の語義については更なる検証を行うことが望まれる。

**4. 1. 11.［mugon］**

『羅葡日』は見出しラテン語［muteo］に対訳ポルトガル語［enmudecer］、対訳日本語［voxini naru］〈唖になる〉を充て、見出しラテン語［obmuteſco］には対訳ポルトガル語［ficar como mudo］、対訳日本語［voxino yŏni naru］〈唖のようになる〉を充てている（表３）。一方、『羅西日』は見出しラテン語［muteo］に対訳スペイン語［enmudecer］、対訳日本語［ubuxini nàru］を充てる一方、見出しラテン語［obmuteſco］に対訳スペイン語［enmudecer］、対訳日本語［mugon xi, uru. ibuxi ni naio, u.］を充てている（表３）。

すなわち、『羅西日』の［mugon xi, uru］〈無言し、する〉は『羅葡日』の［voxino yŏni naru.］〈唖のようになる〉という語義に該当し、［mugon］〈無言〉という語自体は必ずしも「唖」自体を意

表３　『羅葡日』、『羅西日』に載録されている「唖」関連語彙素の比較

| 『羅葡日』『羅西日』<br>見出しラテン語 | 『羅葡日』載録<br>対訳日本語 | 『羅西日』載録<br>対訳日本語 |
|---|---|---|
| mutus | voxi<br>yezzu | vbuxi |
| elinguis | voxi | monoivazu<br>vbuxi |
| muteo | voxini naru | ubuxini nàru |
| obmuteſco | voxino yŏni naru | mugon xi, uru<br>ibuxi ni naio, u |

味するわけではなく、「無言する」という語句は「唖になる」というよりもむしろ「唖のようになる」という意味の方が優勢であった可能性も考えられる。以上の検証より、［mugon］〈無言〉の語義が［voxi］／［vbuxi］〈唖〉の語義と同一であると見なすことには慎重を期することが望まれる。

#### 4. 1. 12. 卑語

『日葡』には卑語を意味する［B.］の註記がある見出し日本語が約90語ある（土井1980；荒木2007）。しかし、『日葡』における「聾」「唖」関連語彙の見出し日本語には卑語の註記は見られない。亀井（1986a）は『日葡』に載録された卑語について、「はっきり<pejorative>と意識されていたような表現が文献に書きのこされるとはかぎらない。そういう僥倖はむしろ例外の偶然に属するであろう。（中略）日ポ辞書には「おし」に対して<asu>という形を載せている。もっとも、これは落葉集にのせる「痙子」（痙字の下に「をし」「ことどもり」の訓あり）とおなじとすれば、いちがいに<pejorative>とはきめられない。すなわち、「あす」の場合には、これはかえって<euphemism>の一種だったのかもしれない。」と述べている。

実際、『日葡』では、［reôquai］〈聾瞶〉に［prouerb. iefino qicazaru cotoua reôquaino gotoxi.］〈諺、是非を聴かざることは聾瞶の如し〉、［mimidouoi］〈耳遠い〉に［mimidouoi cotouari gia.］〈耳遠い理ぢゃ〉、［aʃu］〈痙子〉に［aʃuno yumeuo mite catarazaruga gotoxi.］〈痙子の夢を見て語らざるが如し。〉という諷喩を用いた語釈が併記されている。中世後期から近世初期に手話言語を用いる聾者がいたのかどうかは不明ではあるが、当時は一般的には「聾者」や「聾唖者」は自身の考えを語る術を持たない者と見られており、そのような見方が上記のような暗喩もしくは諷喩に反映されていることが窺われる。また、〈聾瞶〉における例文から、〈聾瞶に〉は〈耳遠な〉と同じく「物事がよく分からない」という暗喩で用いられた可能性もある。

ただ、『日葡』に載録されている「聾」「唖」関連語彙に卑語の註記がないという事実は、「イエズス関係者が卑語の註記を行うことを憚った」可能性の他に、当時は「聾」「唖」関連語彙が必ずしも卑語（<pejorative>）としては認識されていなかった可能性をも示唆している。様々な「障害」関連語彙が放送禁止用語・差別用語と見なされるようになったのは1960年代以降のことに過ぎず、中世から近世にかけて「聾」「唖」関連語彙を含む「障害」関連語彙がどのような観点の下に用いられていたのかは定かではない。中世から近世における当時の人々が「医学的障害」をどのように捉え、「聾」「唖」関連語彙を含む「障害」関連語彙をどのように用いていたのかを検証するためにも、古代から近代に至る対訳辞書群や文献に載録されている「聾」「唖」及び「障害」関連語彙における語彙素及び語義の時系列的整理を行うことが望まれる（小野2011）。

### 4. 2. 対訳辞書群の編纂工程及び系譜

［surdus］、［surdaʃter］、［mutus］、［muteo］、［obmuteʃco］、［elinguis］ の

６語は『羅葡日』及び『羅西日』両方の見出しラテン語に見られるものの、[exurdo]、[obsurdeſco]、[surdè]、[súrditas]、[immuteſco] の５語は『羅葡日』の見出しラテン語にのみ見られる（表２）。すなわち、『羅葡日』に載録されている見出しラテン語に見られる「聾」「唖」関連語彙の方が、『羅西日』よりも多い。このような『羅葡日』と『羅西日』の「聾」「唖」関連見出しラテン語の数の違いは、両者の編纂工程の違いに拠るものと考えられる。『羅葡日』は『*Cornucopiae*』を種本とし、ラテン語からポルトガル語に翻訳したものを更に日本語に翻訳するという翻訳及び編纂作業が中心になったものと見られている（岸本2009）。実際、『羅葡日』に見られた「聾」「唖」関連見出しラテン語は総て『*Cornupiae*』を初めとするラテン語辞書にも記載されている。

一方、『羅西日』の「正篇」と「補遺」は『西日』にしたためられたスペイン語と日本語を基にラテン語を加え、ラテン語のアルファベット順に並べ替えたという編纂過程を辿ったのに対し、「続篇」は『*Calepinus*』の見出しラテン語を基に、対訳スペイン語と対訳日本語を充てる工程を経たものと見られている（大塚1966；大塚・小島1985）。このことから『羅西日』の「聾」「唖」関連語彙は次のような工程を経た可能性も考えられる。

⑴「正篇」「補遺」を編纂するに辺り、『西日』を基に［mutus, mudo, vbuxi］と［surdus, ſordo, qicazu.］の項を設けた。⑵しかし、『西日』に記載された［ſordo un poco, mimidovoi.］は「正篇」「補遺」には載録されなかった。⑶「続篇」を編纂するに辺り、[elinguis]、[muteo]、[obmuteſco]、[surdaster] の4語を新たに載録した。しかし、『羅葡日』のラテン語見出し語[exurdo]、[immuteſco]、[obſurdeſco]、[surdè]、[súrditas] は載録しなかった。

以上の工程の違いを考慮した、キリシタン版・対訳辞書群の『羅葡日』、『日葡』、『葡日』、『西日』、『羅西日』に載録されている「聾」「唖」関連語彙の系譜を図8に示す。「聾」関連語彙の場合、イエズス会関係者の編纂になる『羅葡日』、『日葡』、『葡日』に載録されている語彙と、ドミニコ会宣教師コリャードの編纂になる『西日』、『羅西日』に載録されている

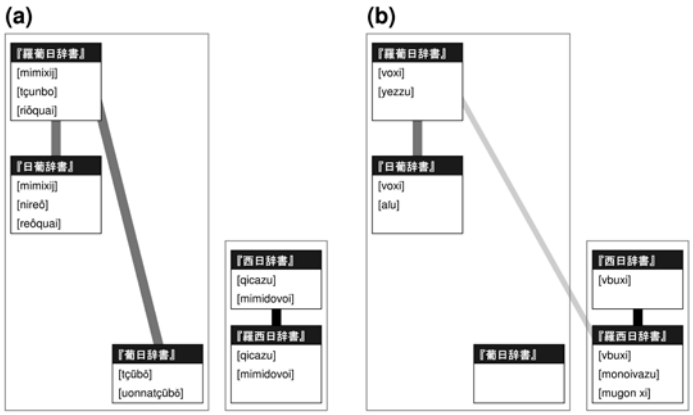



図8　キリシタン版・対訳辞書群における「聾」「唖」関連語彙の系譜。
（a）「聾」関連語彙、（b）「唖」関連語彙。

語彙の間に相関性は見られず、載録語彙の傾向の違いが窺えた。「唖」関連語彙の場合、『羅葡日』は［voxi］〈唖〉と［yezzu］〈言えず〉、『羅西日』は［vbuxi］〈唖〉と［monoivazu］〈もの言わず〉を記載するなど、『羅葡日』と『羅西日』の間には若干の相関性も見受けられた。すなわち、イエズス会関係者の編纂になる対訳辞書群との違いを打ち出すというコリャードの思惑は、「聾」関連語彙ではそれなりに反映されたものの、「唖」関連語彙ではむしろイエズス会関係者が編纂した対訳辞書群との相関性が窺えた。コリャードは『羅西日』の編纂にあたり、『羅葡日』編纂関係者と同じ日本語文献を参照したとの仮説は、「唖」関連語彙における相関性の妥当性を示唆する形になっている（大塚1966）。

### 4. 3. 方言地図

キリシタン版・対訳辞書群の編纂関係者は京都周辺で使われていた語の載録に努める傍ら、九州地方のいわゆる方言の載録にも努めたことが載録語彙の傾向から明らかにされている（柴田1967；亀井1986a）。「唖」方言地図「唖の八」は６系統の方言語彙の分布を一枚にまとめており、これを見ると単純に京都を中心とする方言周圏論を適用することは難しいようにも見受けられる（佐藤2005）。そこで、「聾」「唖」関連語彙に九州地方の方言やその他の地域の方言が見られるかどうかを検証するために、キリシタン版・対訳辞書群に載録されている「聾」「唖」関連語彙と、「聾」「唖」方言地図の対照を行った。

「聾」方言地図より「キカズ」、「ツンボ」、「カズンボ」の3語の東北地方における分布を抜粋編集したものを図９aに示す。東北地方北部は「キカズ」が優勢であるのに対し、東北地方南部では「ツンボ」が優勢であるほか、「キカズ」と「ツンボ」の複合語（あるいは混成語）と見られる「カズンボ」が散見される。「聾」関連語彙が京都、もしくは関東から東北地方を北上伝播したものと考えると、「キカズ」、「ツンボ」の順に伝播し、「キカズ」が「キカンズ」に変化した後、「ツンボ」と複合語「カズンボ」を作ったと考えることも可能である（柳田1930）。

また、「聾」方言地図では八重山地方の方言は「クヂラ」系統に分類されており、「ミミクチ」を祖語とする方言が散見される。更に、九州には「キカズ」系統、「ツンボ」系統の方言が散見される。「ミミクチ」が「ミミシイ」との関連語であるとすると、「ミミクチ」や「ミミシイ」は「キカズ」や「ツンボ」よりも古いものである可能性も考えられる。すなわち、京都を中心とする方言周圏論を前提にすると、［mimixij］〈耳癈〉、［qicazu］〈聞かず〉、［tçumbo］〈聾〉の順に伝播した可能性が窺われる。ただ、この時系列は、キリシタン版・対訳辞書群に載録された「聾」関連語彙の系譜とは必ずしも一致しない。しかし、対訳辞書群の調査による語彙史と方言地図に拠る語彙史の対照は、語彙史の深化を図るうえで有意義なことであり（町2011）、今後は蘭学洋学・対訳辞書群における「聾」関連語彙と「聾」方言地図載録方言との対照も望まれる。

「唖」方言地図より「ウブシ」、「ウグシ」、「ウグ／ウブ」の４語の九州及び中国地方における分布を抜粋編集したも

のを図９bに示す。『西日』や『羅西日』に載録されている［vbuxi］〈唖〉に該当するものと見られる「ウブシ」は、下関地方、周防地方、島根県西部地方、壱岐、対馬、五島列島に散見される一方、天草地方や佐賀地方には［vbuxi］〈唖〉が音韻変化したものと考えられる「ウグシ」、「ウグ／ウブ」が散見される。すなわち、『西日』や『羅西日』は中世後期から近世初期に於ける九州方言であったものと見られる［vbuxi］〈唖〉を載録した可能性が高いものとも考えられる。また、「ウブシ」、「ウグシ」、「ウグ／ウブ」の４語の分布状況を見ると、天草地方を中心とした部分的方言周圏論がしっくりくる。すなわち中世後期から近世初期の間、長崎では［vbuxi］が幅広く使われており、それらが九州北部、中国地方西部に広まっていく一方、天草地方では新たに「ウグシ」、「ウグ／ウブ」が用いられるようになり、現在に至っているという可能性も考えられる。九州の天草地方を中心とする方言周圏論の可能性が窺えることは興味深いものがある。

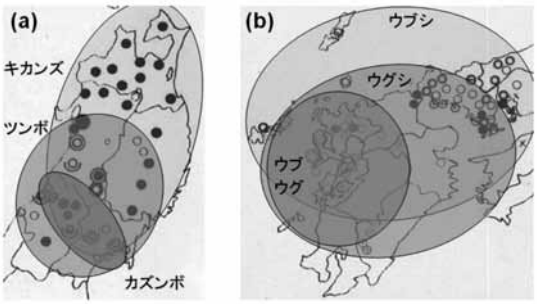



図9 「聾」「唖」関連語彙における方言地図：(a) 東北地方における「聾」関連方言「キカンズ」、「ツンボ」、「カズンボ」の分布、(b) 九州・中国地方における「唖」関連方言「ウブシ」、「ウグシ」、「ウブ／ウグ」の分布。

## 5. 結論

キリシタン版対訳辞書群に載録されている聾唖関連語彙を網羅的に集輯し考証を行った結果を査読付学術誌『国語語彙史の研究』に投稿し採択されたものの、字数の関係より当初の原稿分量の半分以上を削除しため、『国語語彙史の研究』に所収され得なかった比較書誌学的情報に関する記述を該当論文の「補遺」とし投稿することにより聾史研究に寄与することを試みる。

1. キリシタン版・対訳辞書群、『羅葡日』、『日葡』、『葡日』、『西日』、『羅西日』における「聾」関連語彙の調査を行い、［tçunbo］〈聾〉や［mimixij］〈耳癈〉以外に［qicazu］〈聞かず〉が載録されていることを明らかにした。
2. 『西日』、『羅西日』においては、［mimidovoi］〈耳遠い〉が「難聴」の語義を持つ「聾」関連語彙として載録されており、近世初期においても〈聾〉と〈耳遠い〉が使い分けられていたことを明らかにした。
3. キリシタン版・対訳辞書群、『羅葡日』、『日葡』、『葡日』、『西日』、『羅西日』における「唖」関連語彙の調査を行い、［voxi］〈唖〉以外に［vbuxi］〈唖〉、［yezzu］〈言えず〉、［monoivazu］〈もの言わず〉、［mugon］〈無言〉が載録されていることを明らかにした。
4. ［voxi/vbuxi］〈唖〉と［yezzu］〈言えず〉、［monoivazu］〈もの言わず〉、［mugon］〈無言〉の間には語義の

違いが認められる可能性があることを明らかにした。

5．イエズス会関係者の編纂になる『羅葡日』、『日葡』、『葡日』と、ドミニコ会宣教師コリャードの編纂になる『西日』、『羅西日』の間には、「聾」関連語彙においては両群に明らかな傾向の違いが見られる一方、「唖」関連語彙においては両群の間に相関性が窺えることを明らかにした。

6．対訳辞書群に載録されている「聾」関連語彙（６語）及び「唖」関連語彙（４語）と、「聾」「唖」方言地図に載録されている民俗語彙（方言）の対照を行い、「聾」関連語２語、「唖」関連語４語が共通して見られる他、［vbuxi］〈唖〉は九州地方の方言である可能性が高いことを明らかにした。

註

1．斎藤（2001）は「『葡日』載録語彙や寛永12年鎖国令との対照から、『葡日』の成立年代として「1603年より50年ほど下げてもよいのではないかという指摘を加えたい。」と述べている。

2．『*Cornucopiae*』、http://books. google. co. jp/books?id=X37V0OYY8-4C&printsec=frontcover&dq=Ambrogio+Calepino&hl=ja&sa=X&ei=O6k0T7uNB8fGmQWNha37AQ&ved=0CC8Q6AEwADge#v=onepage&q&f=false、2012年１月11日閲覧。

3．『日葡』の伝本及び写本のうち、影印本（和書）が刊行されているものは『日葡辞書』（ボードレイ本）、『パリ本日葡辞書』（パリ本）、『日葡辞書：エヴォラ本』（エヴォラ本）、『日葡辞書：アジュダ文庫本』（アジュダ本）の4冊に上る。アジュダ本は1747年刊行の写本であることから、本稿における対照は行わなかった。『日葡』パリ本が最も古いものと見られているが、「補遺」が欠落しているため、「補遺」に載録されている語（語彙素）は『日葡』ボードレイ本を参照した。

4．『日仏辞書』は『日葡』の仏語翻訳版であるものの、1862～1868年に刊行されたものであり、キリシタン版・対訳辞書群には含まれないことから、本稿における対照は行わなかった。

5．『*Dicionário Raphael Bluteau*』、http://www. brasiliana. usp. br/dicionario/1/mouco 2012年1月11日閲覧。

6．斎藤（2001）は「多くの動詞には直説法単数現在の1人称形と2人称形が示されるが、それを外国語として学ぶ学習者にとって有効な情報として、それぞれの動詞の過去分詞形とSer～、Ter～、Estar～のような複合形がいわば機械的に並べられている。（中略）未対訳部分に残っているのは、「対訳を要せず」という意味とも読める。」と述べている。

7．『*Ambrosius Calepinus Passeratii sive linguarum novem romanae, graecae, ebraicae, gallicae, italicae, germanicae, hispanicae, anglicae, belgicae dictionarium*』, http://books.google.co.jp/books?id=SuxLAAAAcAAJ&printsec=frontcover&dq=Ambrogio+Calepino&hl=ja&sa=X&ei=0MgbT6z_DZDJmAWIjYWrCg&ved=0CFYQ6AEwBjgK#v=onepage&q&f=false、閲覧できる影印は[M]～[Z]の範囲のみ。2015年４月27日閲覧。

8．『大辞林和英集』では[tcznbo]、[mimixij]に加えて[mimiga tōi]という見出し日本語が挙げられており、[mimiga tōi]には対訳英語[hearing impared]が充てられている。

9．『邦訳日葡索引』では[voxi]の翻字には〈瘂〉が充てられているが、本文では〈唖〉に統一した.

参考文献

荒木雅實（2007）「『邦訳日葡辞書』の軽卑語意味分類を中心にして」『拓殖大学語学研究』116, 1-23.

浅原義雄（2008）「『日葡辞書』」『コミュニケーション文化』2, 13-23.

馬場良二（1999）『ジョアン・ロドリゲスの「エレガント」－イエズス会士の日本語教育における日本語観－』風間書房.

土井忠生・森田武・長南実（1980）「解題」『邦訳日葡辞書』岩波書店, 8-29.

遠藤潤一（1974）日葡辞書の欠陥動詞　徳島大学学芸紀要人文科学, 24, 1-35.

福島邦道（1979）「解題」『羅葡日対訳辞書』3-14.

石塚晴通（1976）「解題」『パリ本日葡辞書』勉誠社3-37.

伊藤政雄（1998）「ポルトガル語の中の障害者」『歴史の中のろうあ者』近代出版.

片桐洋一（1983）『日葡辞書』の歌語 －その性格と時代性－　国語語彙史の研究, 4.

岸本恵美（1999）解説　京都大学文学部国語学国文学研究室（編）ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』.

岸本恵美（2005）キリシタン版『羅葡日辞書』とその原典　国語語彙史の研究, 24,

Kishimoto, Emi（2006）. The process of translation in Dictionarium Latino Lusitanicium, ac Iaponicum. *Journal of Asian and African Stidues* 72, 17-26.

岸本恵美（2008）宣教を意識した『羅葡日辞書』の日本語訳　訓点語と訓点資料, 121, 106-95.

岸本恵美（2009）『羅葡日辞書』の錯誤と制作工程　京都大学國文學論叢, 20, 1-16.

亀井孝（1986a）コリアドの辞書に方言ありや　亀井論文集5言語文化くさぐさ　吉川弘文館 pp.423-450.

亀井孝（1986b）「コリアドの辞書に方言ありや」跡追　亀井論文集5言語文化くさぐさ　吉川弘文館 pp.451-456.

金沢大学法文学部国文学研究室（1967）.本文篇凡例　ラホ日辞典の日本語

金子弘（1993）開合　日本史大事典　平凡社 p35.

近藤正尚・中村正巳（2009）.「日葡辞書」に基く名古屋平曲とその復元

町博光（2011）民俗学と語彙　斎藤倫明・石井正彦（編）これからの語彙論　ひつじ書房 pp.175-187.

松本仲子（2009）『日葡辞書』所載飲食関係用語総覧　岩波ブックセンター

三橋健（1979）羅葡日対訳辞書―その書誌的解説―羅葡日対訳辞書　pp.17-40.

森田武（1967）日葡辞書の成立に関する一考察 山田忠雄（編）本邦辞書史論叢　三省堂　pp.3-46.

森田武（1995）日葡辞書提要　清文堂出版

岡山準（1935）日本聾唖史稿　東京聾唖学校（編）東京聾唖学校紀要第二輯　pp.1-36.

大塚光信（1966）解題　コリャード羅西日辞典 明文堂印刷所　pp.3-42.

大塚光信（1967）コリャードの日本語辞書について　山田忠雄（編）本邦辞書史論叢　三省堂 pp.83-115.

大塚光信（1970）Colladoの辞書における出典とことば　キリシタン文化研究会会報, 12, 244-256.

大塚光信（1979）解題　羅西日辞書　勉誠社 pp.359-369.

大塚光信（1989）キリシタン資料と二・三の語国語語彙史の研究, 10,

大塚光信・小島幸枝（1985）解説　コリャード自筆西日辞書　明文堂印刷所

小野正弘（2011）文献学と語彙　斎藤倫明・石井正彦（編）これからの語彙論　ひつじ書房 pp.163-173.

斎藤博（2000）対訳辞書索引の翻字について －『自筆西日辞書』の索引などをめぐって－　東京成徳大学研究紀要, 7, 1-16.

斎藤博（2001）ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』所収日本語の語彙的特徴　東京成徳大学研究紀要, 8, 81-94.

佐藤貴裕（2005）方言周圏論の功罪　国文学, 4, 71-73.

佐竹久仁子（2011）フェミニズムと語彙　斎藤倫明・石井正彦（編）これからの語彙論　ひつじ書房　pp.189-200.

柴田武（1967）『日葡辞書』の九州方言　山田忠雄（編）本邦辞書史論叢　三省堂　pp.49-80.

新谷嘉浩（2010）「つんぼ」の呼称～羅葡日辞書・日葡辞書から考察する～　近畿聾史研究グループ（編）聾史レポート集, 1, 6-34.

島正三（1973）羅葡日対訳辞書検案　文化書房博文社.

津名道代（2005）難聴　知られざる人間風景（下）日本史に探る聴覚障害者群像　文理閣.

山本正志（2005）ことばに障害がある人の歴史をさぐる　文理閣.

柳田國男（1930）蝸牛考　刀江書院.